

Title	逡巡、躊躇に関する考察：動物と人間におけるコンフリクト
Sub Title	A theoretical study on hesitating behavior : conflicts in animal and in man
Author	印東, 太郎(Indow, Tarow)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.35 (1958. 11) ,p.589- 614
JaLC DOI	
Abstract	The theoretical model developed by K. Lewin and by N.E. Miller concerning conflict were discussed with special emphasis upon its application to typical cases taken from examples in human behavior. The model formulates the conditions of the life space under which a subject should fall into conflict. In reviewing a few experimental studies on conflict carried with albino rats and with cats, it was pointed out that these studies did not directly concern with verification of the assumptions underlying the model. In fact, the model needs no experimental verification because of the logical nature in its formulation. This model is always a matter of interpretation which is to be offered whenever conflict is observed, but it is not concrete enough to predict in advance the precise course of behavior which is to be observed under the given conditions. Nevertheless, it seems to the author, the model is worth formulating because it provides us with some informations concerning conflict which can not be attained otherwise. For instance, it was argued as a logical consequence of the model that a subject will never fall into conflict unless there is, explicitly or implicitly, a negative force influencing its behavior. And it was also discussed that taking into consideration by man the subjective probability of achieving a positive goal or of avoiding a negative goal is what distinguishes conflict in man from that in animal.
Notes	V 心理,慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000035-0594

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

逡巡、躊躇に関する考察

——動物と人間におけるコンフリクト——

印 東 太 郎

序

われわれの日常の行動は常によどみなく行われているとは限らない。時に停滞があり、その中には逡巡、躊躇と呼ばれるべき場合が数えられる。この逡巡、躊躇という行動の型は、一般に *conflict* といわれる状態の一形態と見なすことができると思われ、そう考えると、それは人間に固有なものではない。動物においてもまた、少くとも高等動物であれば、われわれはこの型の行動を認めることができるであろう。そこで、まず、動物、人間をひきくるめ、コンフリクト、殊に逡巡、躊躇と呼ばれるべき行動形態の成立するための条件に関し理論的考察を加え、それに附随し若干の動物実験の結果を紹介し、ついで、人間におけるコンフリクトが動物におけるそれと異なる点、すなわち人間の逡巡、躊躇の成立条件に見られる特異性について述べることにしたい。

ハムレットの "to be or not to be" に代表されるように、決断、決行にいたるまでには多くの苦悩を経なけ

ればならない場合があり、この懊悩、煩悶と呼ばれる状態もまた一つのコンフリクトに他ならない。もとより心理学はこのような懊悩、煩悶を軽減する上に何の力にもならないであろう。しかし、その苦悩の下にわれわれがさらされているその状態の構造、一般的にいつて、コンフリクトがよってもって成立する力理(dynamics)に關し一種の定式化を試みておくこともまた無駄ではないであろう。

コンフリクトの成立条件

われわれがその行動において一つの岐路に立つ場合、すなわち、行動のコースとして少くともA、Aの二つがあり、そのいずれを選ぶべきか選択をためらっている状態を、以下、コンフリクトと呼ぶ。選択されるべきコースの具体的内容はこれを問うところではない。朝、家を出る時に傘をもって行こうか、どうしようかと迷う軽微なケースから、解散を断行すべきであるか、総辭職にふみ切るべきであるかというような場合における首相の心事にいたるまで、要するに、上述の構造をもつ心理的状态をすべてひきくるめて考えるのである。このように定義されたコンフリクトに關し、殊にその成立条件について、最初に考察を加えた心理学者は多分レヴィンである。⁽¹⁾ 精神分析学の始祖フロイドの残したアイデアを経験科学の軌道にのせることに努めたレヴィンは、その努力の一環として、コンフリクトの問題を取上げたのである。その後、比較的近年にいたって、イエール大学のミイラーが組織的にその研究にのり出し、幾つかの論文を公けにしている。⁽²⁾⁽³⁾ その所説を動物実験によって検証しようと努めているところに、レヴィンと異なるミイラーの特色があるといえはいえるが、その基本線は明らかにレヴィ

ンの延長と見るべきものであろう。しかし、彼の構成がレヴィンのそれよりもよくまとまっていることは事実なので、彼の構想を中心にコンフリクトの成立条件を導くに当り必要とされる諸前提をまず列挙しておく。ただし、彼はその適用範囲として専ら動物実験のみを念頭におき、その定式化も、少くとも表現の上では、操作的 (operationally) に定義し易い、そのかわり、その種の実験場面にもみ通用する表現を用いているのであるが、ここではわれわれの経験するコンフリクトの性格を明らかにすることこそその関心事になっているので、多少「比喩的」に解釈されなければならない概念も用いて述べることにする。その可否に関する考察は第四節において述べよう。

(前提1) 正の誘意性 (valence) をもつ目標が行動者に作用する強さも、負の誘意性をもつ目標が行動者に作用する強さも、行動者が目標に接近し、両者の距離が短縮するにつれて単調に (monotonously) 増大する。

(前提2) 負の誘意性の作用する力の方が、正の誘意性の作用する力よりも、上述の距離の短縮につれてより急激に増大する。

(前提3) その正、負を問わず、それが行動者に作用する力は、行動者の位置がどこにあるにせよ、誘意性の増加につれて増大し、誘意性の低下につれて減少する。

(前提4) 正、負二つの作用力の下にあつては、その強い方の力にしたがつて行動のコースは決定される。

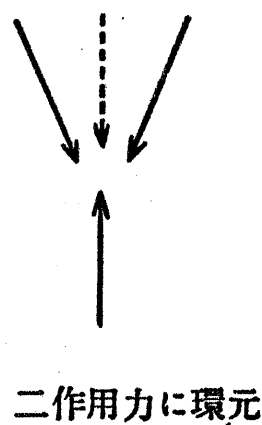
以上の前提について、多少、註釈を加える必要がある。この場合、まず、行動にはすべて何らかの目標と呼ばれるべきものがあるとして、それは、時に行動者がそれに接近し、それを獲得しようとする目標であり (正の誘意性)、時に行動者がそれを回避し、それから遠ざかろうとする目標である (負の誘意性) とする。この目標ということも、接近、回避、あるいは目標と行動者との距離ということも、状況に応じかなり比喩的に解され

てもよいもので、人があるポストを望んでいるとすればそれは正の誘意性をもつ目標であり、地位が昇進してそのポストに近づくとすればそれは目標からの距離の短縮と表現されるのである。また、スキャンダルの公表されることを恐れてそのもみ消しに奔走している人にとっては、その公表は負の誘意性をもつ目標で、その可能性の薄らぐことは目標との距離の増大に他ならない。距離といい、作用する強さというのも、必ずしもそれが物理的な意味をもつ場合に限られる必要はないであろう。すると、(前提1)は、例えば、勝利を目前にして応援団はますます興奮し、手術の時刻が迫って患者はいよいよ深刻な不安におののくということをし、それがより明確な形をとるのは、行動者が充分に目標に接近したところで突然その事態の消失する場合であろう。釣りをした魚は大きい"といわれ、また、危機を脱した安堵はそれが目前に迫っていた場合に特に大きいであろう。(前提2および4)はそれ自身としては例証し難い性格のもので、コンフリクトの成立条件のところで述べる。一方、(前提3)は、目標と行動者の距離のいかんを問わず、行動者に作用する引力ないし斥力の強さは、また、そこに到達できた場合その行動者の得る満足の大きさ、あるいは、その状態に立到った場合その行動者の味わう失意、落胆の大きさを規定する正負の誘意性の函数でもあることを意味し、第一次試験に合格の発表に接しても、痛切に入學を切望している受験生とそれ程でもない受験生とではその気持は異なるであろうし、簡単な手術と生命の危険を伴うそれとでは、手術室の敷居をまたぐ際の覚悟も自ずと異なってくるというような事実に対応する。

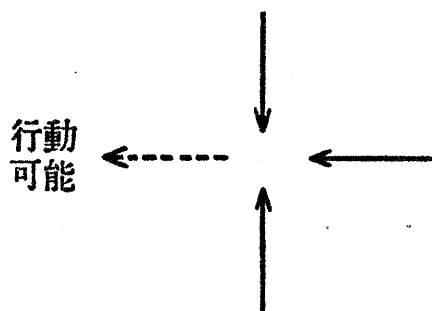
上述の前提を設けると、それからコンフリクトの成立条件と、コンフリクトの諸型とを導くことができる。行動のコースの決定に当ってその選択に迷うというコンフリクトの定義から、まず、その成立には次の条件が必要であろう。

(成立条件1) 二つの、そして一方に接近する行動をとることが同時に他方から退くことに当る排反な力が行動者に作用していなければならない。

なお、考察は二作用力の場合に限定してあるが、それによって議論の一般性の失われることはないであろう。



二作用力に環元



コンフリクト不成立

Fig. 1

以下、排反な二力を比喩的に表現するため、方向の相反する二本のベクトルを用いることにするが、二つ以上の力の作用している場合には、その各々が相互に排反になり得ないので、コンフリクトは成立しないか、あるいは、相互に排反ではない幾つかの力をまとめて二作用力のケースに還元して考えることができるか、そのいずれかの形をとるからである (Fig. 1)。すると、この条件に相当する場面として次の三種の型を、まず、あげることができる。

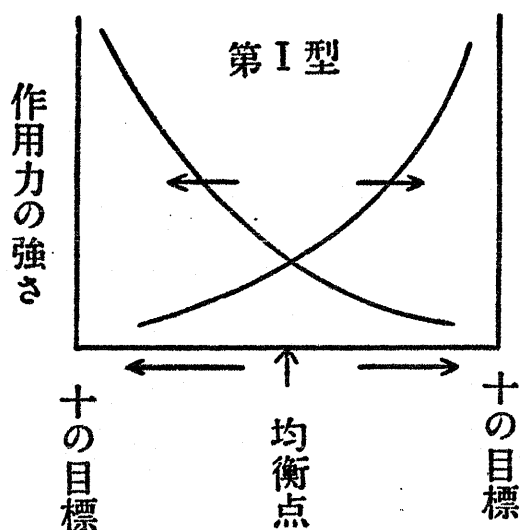


Fig. 2

(第I型) 相反する方向にそれぞれ正の誘意性をもつ二つの目標の同時に存在する場合 (Fig. 2)

(第II型) 相反する方向にそれぞれ負の誘意性をもつ二つの目標の同時に存在する場合 (Fig. 3)。

(第III型) 同一の方向に正の誘意性をもつ目標と負の誘意性をもつ目標が

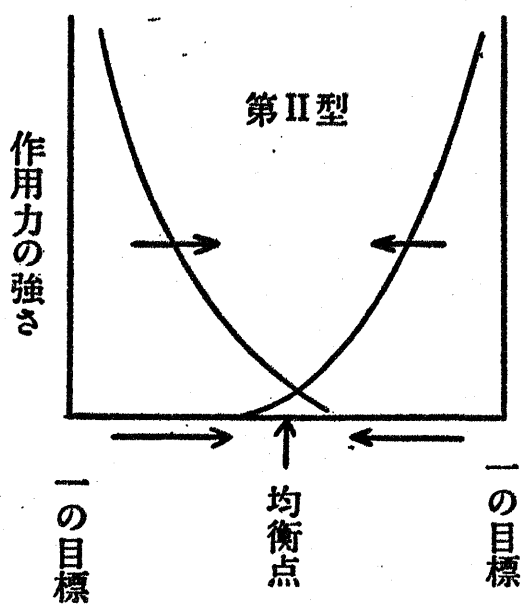


Fig. 3

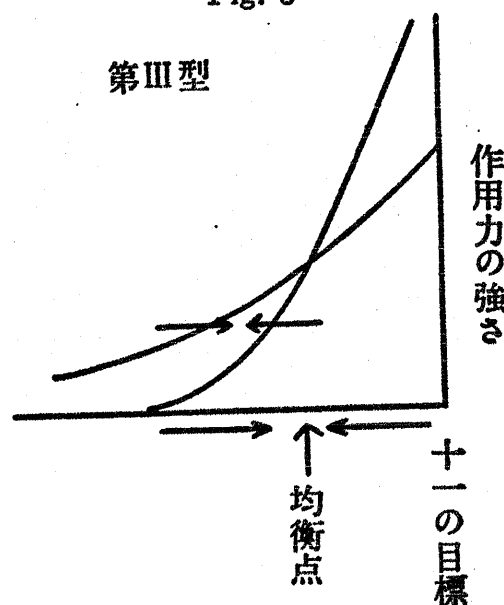


Fig. 4

けられた矢印は作用力の方向を表す。すると、行動者がコンフリクトを経験するためには次の条件の必要とされることは明らかであろう。

(成立条件2) 相互に排反な二つの作用力の変化を表す二曲線は交わっていないなければならない。

さもないと、距離の如何を問わず、常に片方の作用力が他を制し、そこに生起すべき行動の方向は常に一つに定まってしまうか、あるいは全く作用力を受けないか、そのいずれかであろう (Fig. 5)。一方、Fig. 2~4 に示されるような力の配分の下にあっては、図に均衡点と印された位置を境に、その距離における優勢な力の方向(図の横軸の下の方の矢印)は変化する。従って、第II、第III型にあっては均衡点を一歩こえて目標に近づけば斥力の影響下に入って後退を余儀なくされ、均衡点から一歩退けば引力の作用圏に入り再び目標に向ってひきつけられ、ここに行きつもどりつの振動、すなわち、コンフリクトの状態に陥ることになるのである。この場合、作用力は

同時に存在するか、同一の目標が同時に正、負二つの誘惑性を兼備する場合 (Fig. 4)。図の横軸はいずれも行動者と目標との距離を、縦軸はその距離における作用力の強さを示し、作用力の距離による変化を表す単調減少曲線につ

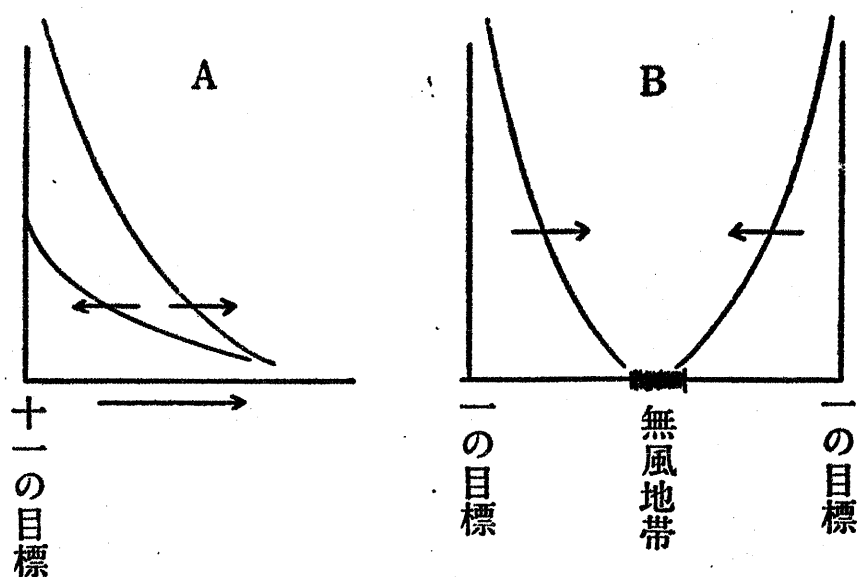


Fig. 5

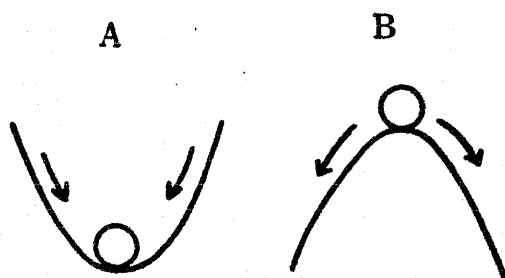


Fig. 6

常に行動者を均衡点の位置に止めるように働き、象徴的にいえば、行動者は Fig. 5 の A のボールのような状態であるから、これを「安定」と称する。少しくらいランダムな振動が加っても、その状態をぬけ出すことは難しい。一方、第 I 型における行動者の状態は Fig. 5 の B のボールにたとえられ、微細な振動の結果によって、一旦、いずれか一方に傾けば、もはや均衡点にもどることはないであろう。すなわち、「不安定」と呼ばるべきもので、コンフリクトを経験するとすれば、それは行動者が、偶々、均衡点に位している瞬間に過ぎず、些細な事情によってもスタートの方向が片方に定まれば、躊躇なく行動はその目標に向かって起されることになるのである。A、B 双方の試験に合格し、どちらに入学手続きをとろうかと迷っている学生があるとしたら、それは第 I 型の事態に当るであろう。入学を考える以上、両校とも彼にとっては正の誘惑性をもつのであろうし、一方の魅力が圧倒的であれば迷わないのであるから、その時期において二つの曲線は交わっていることになる。そして、このような場合、しばしば人の決意は先輩の一寸したアドバイスのような事情によって簡単に定められ易いものである。以上の考察はこれをまとめると、次のような

命題を構成するであろう。

(命題1) 「安定」な第Ⅱ型、第Ⅲ型においては決断に時間を要し、コンフリクトは長びき易い。

(命題2) 「不安定」な第Ⅰ型にあっては、コンフリクトがもし起るとしても、それは直ちに解消される。

コンフリクトを成立せしめる力理には上記のように三つの型があり、その結果として生起し得るコンフリクトには、このように二つの型の存在する訳であるが、少しく詳細に考えると、次のような補足を必要とするであろう。

(成立条件3) 行動のコースの選択に当り、若干の時間的余裕が存在しなければならない。

決断に緊急を要する場合には、たとえ瞬間的に上掲の諸型が成立しても、逡巡、躊躇している余裕はなく、コンフリクトは一瞬にして過去のものとなる。打者のバットの先端が一瞬ピクリと動いたが、結局、見送ったというようなケースがこれに当る。一方、投手が次の投球の種類を定める時には比較的時間の余裕があり、マウンド上その選択に迷う態度の明瞭に看取されるのは珍らしいことではないであろう。

(成立条件4) 第Ⅱ型においては、行動者の当該場面からの脱出を拘束する枠が存在しなければならない。

この場合、もしその枠が存在しなければ、行動者は二つの負の作用力とは直角の方向に行動を起し、二作用力の圧力の下に身をさらすことはこれを避けるであろう。この枠ということは、もちろん、物理的に行動を拘束する物体のみをさすものではない。歯痛に悩みながらも、なお、治療に伴う不愉快さのために歯医者を訪れるのを一寸延しにするような型の行動をとる人は少くなく、行こうと思立っては止め、痛みに堪えかねてまた行こうと思うという不決断の状態を続け、その状態からぬけ出すことができないのであるが、この場合、一見、上述の枠

は存在しないように見えるかも知れない。しかし、どこに身をおいても痛みから逃れることはできず、この負の作用力の圏外に出る道は治療を受ける以外にないという場面構造は正しく粹の存在に相当するのである。一般に行動者は自ら進んで第Ⅱ型に表されるような場面の中に入ることはない。そのような力の配分は彼自身が進んで作り出したものではなく、行動者は止むなくその渦中に立たされるのである。上述の歯痛の場合、その痛みは勿論自ら招いたものではないが、もう一つの負の目標の導入されるメカニズムもある意味で興味深い。治療ということは現在の負の状態すなわち歯痛を脱する唯一の手段として彼の念頭に浮んだので、その意味で治療そのものは正の誘意性をもっているのである。純粹に負の力だけしかもないものを行動者が自ら行動の目標にたてることはない。ただそれが同時に負の力を持ち、それを通過せず正の目標に達することが不可能であるため、ここに第Ⅱ型の配置となるのである。

人が自殺の誘惑に陥る事例の中には、構造上、このような型の場合が少なくないように思われる。何らかの事情で生きること自体を苦痛と感ずるようになった時、この負の作用力の圏外に脱する唯一の手段は死であろう。かくして死は「誘発された」正の誘意性をもつてその人に働きかけるのである。もし、その人にとり死が同時に負の誘意性を備えていれば、人は懊悩と闘わなければならない（第Ⅲ型）。しかし、その人にとって死が負の力を兼備していないか、あるいはそれが弱く、死にふみ切る地点の手前で誘発された正の作用力と交わるだけの力をもたなければ、人は死を選ぶであろう。同じく死に直面するにしても、このような場合、それはその背後に秘められている「誘発された」正の誘意性によって行動場面に「自発的に」導入されたので、生に執着しながら病氣その他の外部的事情で否応なしに死を「意識させられて」いる人の場合とはその導入のメカニズムが異なる。

ここに述べた（成立条件4）は第Ⅱ型の場合にのみ必要とされる。それ以外の場合、すなわち、当該場面に正の作用力の存在する場合には行動者は常にその正の力によってそこに拘束され、自らその作用圏外に去ることはないからである。

コンフリクトが生起している時、そこに充たされていない諸条件をあげるとすれば、多分、上述の考察によってそのすべてがつくされているであろう。後に述べるように、このような定式化はあくまでも「事後の解釈」であって、「事前の予測」ではないのであるが、ともかく、コンフリクトに陥るとすればそれは必ずその下でなければならない力理の構造だけは定式化されたと認めてもよいように思われる。そして、この定式化の背後には最初に述べた四つの前提がある。（前提1と4）はすべての場合に用いられ、（前提2）は特に第Ⅱ型を導くのに必要とされたのである。

動物を用いた実験的研究

前節に述べた考察に含まれている若干の事象を実験的研究の対象にしようとすれば、勢い人間を被験者として実験を行うことは難しい。もし無理に行ってみても、それは最初から予想し得るような結果を改めて示すのに止まり兼ねない。そこで、実験の素材としては主に動物が用いられ、既に相当数の報告が公けにされているのであるが、その過半数は直接にコンフリクト状態に関するものではなく、転嫁（displacement）と呼ばれる現象が構造上コンフリクトと同一の型をとるので、それとの関連において実験が行われている。⁽⁵⁾⁽¹¹⁾ 転嫁とは人間でいえば「八

つ当り」に相当するもので、忿懣をぶちまけた相手A（正の誘意性）は上役で抵抗が大きく（負の誘意性）、勢い忿懣はより抵抗の少い相手Bに向けられるという類の行動で、この場合、「距離」と呼ばれていた遠近の次元をAとBとの「関係」すなわち類似、相違の次元でおきかえれば第三型を拡張した形でこれを扱うことができるというのであるが、本稿においては紙数の都合上この転嫁の問題には一切ふれないことにしたい。従って、ここには直接的にコンフリクトそのものに関して行われた実験の中から適当なものについてのみ簡単に述べる。

ブラウンはラット (albino rat) にひものついた首輪をつけ、滑車を通してそのひもを一端の固定されたスプリングに連結させる装置を作った。⁽¹²⁾⁽¹³⁾すると、単走路 (alley) に入れられたラットが一方に進む場合、一旦ひもがピンとはってから更に進もうと努めるにはラットはひもを通してスプリングをひっぱることでなり、スプリングのひびを記録すれば、それによってひものはった位置においてラットがどれだけ「熱心」に進もうと努めたかを量示することができる。目標からいろいろな距離における作用力の強さをこのようにして表すことにして、ブラウンは次のような実験を行った。首輪に慣らすため、まず、ひもをつけず首輪だけをはめ、従って何ら行動の束縛されないラットを長さ 200cm の単走路の一端に入れ、他端につけられた目印のランプに向って走りそこで餌をとる訓練を数日間行い、その後、あるラットは46時間絶食の後に、あるラットは1時間絶食の後に、ひもをつけて単走路に入れられ、ランプ（正の目標）から、あるいは170cmのところ、あるいは30cmのところではひもがあり、それぞれの場所における正の作用力の強さが測定された。一方、他のラットは1時間絶食の後、一旦、単走路に入れられ、何時もと同様に餌のところに走ったところで、あるいは135maあるいは1maの電撃ショック⁽¹⁴⁾を1秒間受け、一度、単走路の外へ出されてから1分後、ひもをつけて先刻ショックを受けた位置に降された。シ

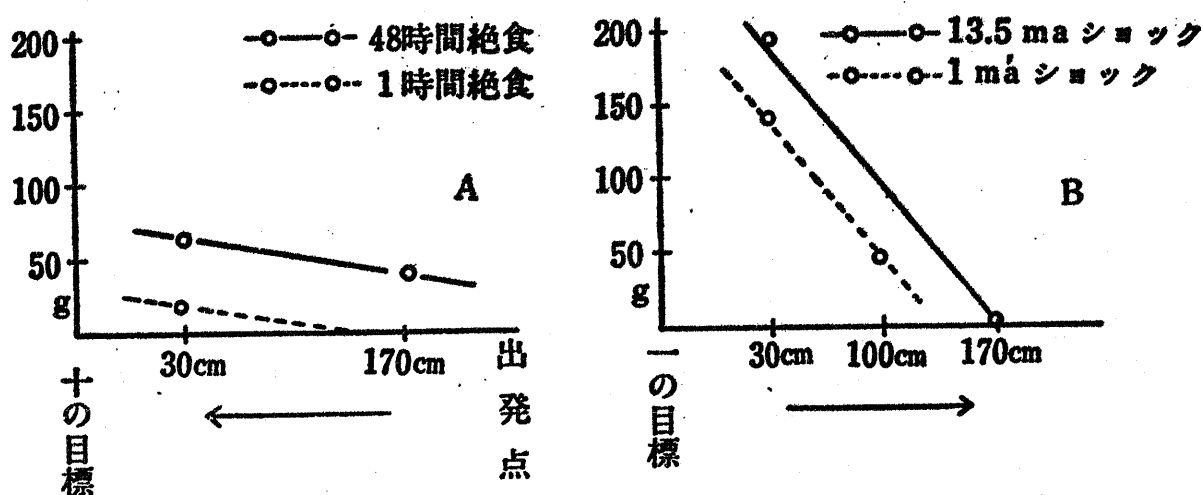


Fig. 7

ショックの効果は一度で充分で、ラットはランプ（負の目標）とは反対方向に向って走るのであるが、適当なところでひもがはり、その場所における負の作用力の強さが測定されたのである。

このような実験の結果をまとめると Fig. 7 の A、B ができる。縦軸は 5 秒間ラットのひっぱったスプリングののびの平均値をグラムに換算した値である。実測値を直線でつなぎ、また、平行線で外挿を行ったのは全く便宜上の問題に過ぎないが、それが右下りの勾配を示すことは（前提 1）を、負の作用力の B の方が正の作用力の A よりもその勾配の急なことは（前提 2）を、そして、空腹の状態なりショックの強さなりが変り、目標の誘意性が変化すれば、それに応じて作用力が上下の方向に動くことは（前提 3）を支持することになる。

（註 2）
ブラウン自身の報告の内容は上述のような事実の詳細な検討につきているが、更に進んで、図の A、B を組合せた実験場面にラットをおけば、すなわち、ランプのところを餌をとる訓練の後（正の誘意性の確立）、一旦、そこでショックをかけ（負の誘意性の導入）、その後ラットを単走路の他端に入れば、その時の作用力の配分は第 III 型になり、従って、ランプに対していわば “to go or not to go” の躊躇を示すはずであることを指摘した

のはミイラーであり^(註3)、彼によれば、事実そのような行動が観察されるというのである。もし、この場合、正負の誘意性の強さをかえ、図の実線、点線の作用力をいろいろに組合せると、それによってラットのコンフリクトを示す位置が単走路の中でいろいろに変化するということまで観察にかかる面白いのであるが、実験の精度からいって、そこまでは到底望めそうもない。Fig. 7 のブラウンの実測値も、それぞれ20匹のグループの平均値であるが、その標準偏差は甚だ大きいのである。

動物実験の場合、定式化に用いられている「距離」は文字通りの物理的距離に、行動者の行動は目標に対する文字通りの前進、後退に対応するので、ミイラーはこの場合、第三型に対し approach-avoidance conflict という名称を与えている。そして、動物において実験的にこのコンフリクトを作り出すことができるのであるから、それを利用してより高次の実験的研究を行う道が拓かれたのである。

例えば、次のような実験が行われた。⁽¹⁵⁾ 12匹の猫を用い、長さ6cmの単走路で一端にある餌箱に走り餌をとる approach の訓練を行い、ついで餌箱に脚をかけるとまず1maの電撃ショックを与える。直ぐ猫を出して1分おいて再び他端の出発点に猫を入れ、もし猫が再び餌箱に脚をかければ以前より0.05ma強いショックをかけることを繰返し、遂に1分間猫を単走路の中に放置しても餌箱に脚をかけなくなるまでショックを続ける。これで餌の正の誘意性の作用力の曲線とショックの負の作用力の曲線とが餌箱の前方のどこかで交る配置ができ上がったのである。事実、猫は明瞭にコンフリクトの徴候を示すと報告されている。そこで、一群の猫には体重1.5kg当り18mgの sodium amytal を生理的食塩水にかして注射する(実験群)。これは昏睡をおこさず、しかも充分に酩酊させる量であるといわれる。一方、もう一群の猫には生理的食塩水のみを注射する(統制群)。いずれの群

も注射後5分、10分、15分、20分に1分間ずつ単走路の出発点に入れられその行動が観察されるが、このテスト試行中、餌箱に脚をかけた猫についてはその後の試行は行わない。すると、最高4回までの注射後テスト試行において餌箱に脚をかける反応を示したのは、実験群においては7匹中そのすべてであったのに反し、統制群にあっては5匹中ただ一匹に過ぎなかったと報告されている。この相違は統計的にも有意 (significant) で、アミタールはショックの導入により成立したコンフリクトを正の作用力に応ずる行動の決行という形で終焉させる効果を有するものと認めざるを得ない。この結果を更に分析して考えるには、しかし、コンフリクトの終焉という問題を、一応、とり上げておく必要がある。

第二節に述べた力理によれば、「不安定」な第I型の場合には当面の二作用以外の原因に帰因する random noise にもとづく行動の微細な動揺の存在さえ仮定すればよいのであるが、「安定」な第II、第III型においては、その場面構造の存続する限り、行動者は均衡点の近傍から動くことはできない。従って、この場合コンフリクトに終焉がもたらされるとしたらそれは次のいずれかの経過を経た結果であろう。

(A) 場面の構造が根本的に変化し、コンフリクトの成立条件を充足しなくなる。

目標、誘意性、距離などの概念による行動場面の構造の象徴的表現は、その行動に影響し得るすべての事象をつくさず closed system ではないのであるから、そこに算入されていない外部的な原因によって場面構造は一変することもあり得る。例えば今まで目標として存在し行動を規定していたものが、たとえ物理的にはなお存在を続けていても、突如として行動に対する目標としての意義を失うという場合もあろう。「心機一転」と呼ばれるのも多くこのような変化をさすのかも知れない。

(B) 誘意性の相対的变化により、作用力を表す二つの曲線が交らなくなる。

場面の構造が根本的に変化しないまでも、同じく系外の原因により、二つの誘意性に变化がおこれば、(前提3)により、作用力を表す曲線は上下の方向に動き、もし、二曲線が当面の距離範囲内で交らなくなれば、(前提4)によりコンフリクトに終焉がもたらされるであろう。

上記のアミタールが猫にもたらした変化をこの (B) と考えることに恐らく異存はないであろう。とすれば、餌のもつ正の誘意性が増大したのか、ショックのもつ負の誘意性が減少したのか、そのいずれかでなければならぬ。常識的には負の誘意性の低下と考えるのが自然であろうし、他にこの仮説を支持する実験結果も報告されているのである。^{(16)(註3)}

不幸にして原報告に直接あたる機会に恵まれなかったが、次のような実験結果も得られているそうである。⁽¹⁷⁾ 猫を前述のテクニックで、approach-avoidance conflict に陥れ、アルコールの5%混入したミルクを与えると電撃ショックの負の作用力の低下が認められる。ここまでは前記のアミタールの実験と揆を一にする結果であるが、この場合、普通の状態であればただのミルクの方を好む猫が、テスト試行を反復するとその出発に当りアルコール入りのミルクを好むようになるというのである。人間で言えば、一杯ひっかけて気を大きくしてから……というのであろうか。追試の必要があると思われるが、事実であればなかなか面白い。

以上、コンフリクトをめぐる行われた実験について簡単に述べたが、ここでその意義について考えてみたい。上述の紹介の内容からも明らかなように、この種の実験の価値はコンフリクト状態を人工的に作り出し得るといふ発見の後は、その事態を利用して作用力の相対的強さに関する何らかの知見を齎らすところにあり、その方向

は第一節に述べたコンフリクトの成立条件そのものの実験的検証に向けられてはいない。実際、コンフリクトはあの成立条件から必然的に導かれる一つの論理的帰結であり、そこには何ら実験的検証は必要とされないように思われる。もしコンフリクトが生起すれば、その事態は前記の構造をもつのであり、もしコンフリクトに導かれなかったら、その事態には構造上どこか前記の条件を充足しないところがあるのである。諸前提の中で最も実験的検証の必要とされるのは（前提2）であり、ブラウンの実験はそれを実証したように思われるかも知れない。しかし、（前提2）は、ただ、それが成立する時には論理的に第Ⅱ型のコンフリクトに導かれるというに止まる。負の作用力の曲線の勾配が正の作用力のそれよりも大きいという前提が常に成立するか否かということとは別箇の問題であり、既に指摘したように、ブラウンの結果はそれが成立する一つのケースを示したのに過ぎない。本稿に扱った定式化は、それが充足されればコンフリクトに陥るという論理的条件を示すに止まり、元来、それは実験の問題ではない。それが実験的研究の課題となる為には、どのような具体的条件の下でこの論理的なコンフリクトの成立条件が充足されるかというところまで定式化されていなければならないのである。本稿の定式化はいわば中途半端な状態にあるが、その意義については第四節において更に反省することにし、次に、人間に観察されるコンフリクト、特にその特性について述べる。

人間における逡巡、躊躇

第二節においてコンフリクトの成立条件を定式化するに当り、既にできるだけ人間の行動を例にその考察を行

った。目標、距離、approach, avoidance というような概念をある程度「比喩的」に解することを許せば、それはわれわれの遭遇する逡巡、躊躇に妥当な解釈を与えてくれるように思われる。

愛情を打明けようとしては、いざとなると言葉が口に出ないというようなケースは「安定」な構造をもつ第Ⅱ型であるが、この種のコンフリクトが一般に長びくことは周知の通りである。この場合、負の力として作用するのは羞恥であろうか、打明けた結果に対する不安であろうか、いずれにせよ、言葉は喉まで出かかり目標との距離の短縮したところで相対的に増大した負の作用力に屈し、それは呑み込まれてしまう。そして再び相対的に力を得た正の作用力にひかれて、人は打明けるきっかけを探すのである。一方、同じく「安定」であっても、第Ⅱ型において人間が現実コンフリクトを経験するのは、比較的、時間的に短い場合が多い。それは、負の作用力の曲線の勾配が大きい場合の多いため、二つの負の目標間の距離が充分に小さくないと両者は交叉しないことが多いからであろう。嫌なことには切羽つまらないと手をつけないのがわれわれの通弊である。気の染まない原稿を引受けたとすれば人はメ切の間近に迫るまではなかなか手をつけない。この場合、執筆の気苦労という負の誘意性Aと、期日までに脱稿し責任を果すという目標B(正の誘意性)に達し得なかった時の不義理というようなも一つの負の誘意性Bとの間にはさまれることになる。Aを通過せずにはBに到達できないという意味でAとBとは排反であり、BはB以外のすべてのケースを包含する以上、人はAとBの作用力の圏外に逃れることはできない。しかし、期日の迫らない間は、すなわち、比喩的にAとBの間の距離が大と表現できる間は、両作用力の曲線は交るに到らず、人は安泰である(FigureのB)。書かねばならないとあせっては筆を投げるといようなことをはじめるのは、多分、期日が切迫し、A、Bの距離が短縮して両者がそれぞれ充分な作用力を人に及ぼすよ

うになってからであろう。そして、遂にBの斥力に押されて、Aを超え、人はBに達することになるのである。もつとも、もし破約を決して筆を折るとしたら、それは第三節に述べた(A)型の終末で、これは心機一転というよりは「やけ」と称すべきものであろう。

われわれの日常現活を顧みると、二つの品物の間で、Aを買おうかBにしようかと選択に迷うことが少くない。AもBも欲しいのであるからいずれも正の誘意性をもつはずで、第I型に当るのであるが、このコンフリクトは(命題2)に述べられているように簡単には終焉しない。Aに決めようとする瞬間、再びBに心をひかれるという形で、決断には相当の時間を要するのが普通であろう。従って、ここには第二節に考察した以外の力理が働いていなければならないのである。この場合の特色は、一方を購入すれば他方はその取得をあきらめなければならないという事情で、Aの取得は、当然、正の誘意性をもつが、それは同時にBを失わねばならないという負の力を兼備しており、Bの取得についても同じことがいえる。とすれば、この行動場面の構造の正しい表現は第I型ではなく、第II型を二つ組合せた第IV型でなければならない(図5・8)。これは明らかに「安定」である。事実、このかくされた負の誘意性の存在しない場合、すなわち二つの正の力のみが作用している時に、われわれはその間で選択に迷うということはない。銀座に出るのにバスと電車の便があり、その人にとって特にどちらかが好ましいということもないとしたら、彼は何の躊躇もなく先に来た方に乗るであろう。一方を利用することが他方を利用しないことであっても、この場合、それは何ら負の力を誘発しないからである。二つの商品A、Bの双方を同時に購入し得る資力のある時にも、時間的な *infinitesimal* についていえば、どちらかを先に手にとらなければならぬのであるが、人は手近にある方から手にとるだけの話で、このような場合、当面の二作用力以外の原因によ

る random noise によってユースは一瞬の間に、そして殆ど意識さえされずに定まってしまうのは、Fig. 6 の B の比喩でいえば、卵を机上に直立させておくのが難かしいのと同じである。そこで、第二節に述べた（命題1、2）を補足して次のようにいうことができるであろう。

（命題3）「不安定」な第I型にあっては、意識される程度のコンフリクトに導かれることはないといってもよい。

（命題4）つまり、コンフリクトの看取されるのは、第II、第III、第IV型に限られ、従ってコンフリクトの生起するところには必ず負の作用力が顕在的、あるいは潜在的に存在することになる。

この潜在的な負の力は、多くの場合、多少なりとも正の誘意性をもつ状態を失うという事情によって誘発される。第二節において自殺を想う人について述べたが、何らかの事情で生きること自体を苦痛と感ずるようになった

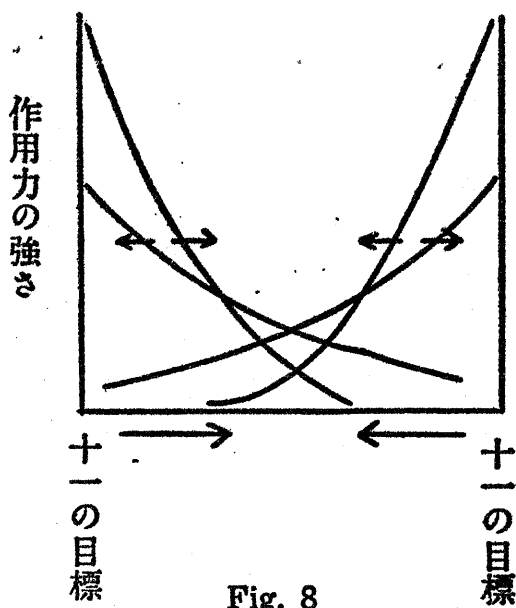


Fig. 8

た為に死という目標に正の誘意性が誘発されていても、なお死を前にして逡巡するとしたら、それは死そのものに対する本能的な恐怖か、あるいは、なお正の誘意性も失いきっていない生を捨てるという事態によって死に誘導された負の作用力によるものである。また、欲しい品物を前にしてなお財布の紐をゆるめかねている人のコンフリクトは、そこに払わねばならない金額によって他に求め得るかも知れない効用を失うことによってその品物の購入に誘導された潜在的な負の誘意性を考えなければこれを理解することはできない。このような潜在的な作用力の誘導

は、一般に、可能なる状態に対する配慮によって生ずるもので、当然、相当の perspective の存在を前提とする。従ってそれは人間に固有とまではいえないにしても、少くとも人間行動においてより頻繁に見出されるように思われるのである。

この可能なる状態の顧慮ということが最も顕著にその存在を示すのは主観的確率 (subjective probability) という形においてであろう。今まで、目標を固定したものととして、それから発する作用力をそのまま考えて来たが、われわれの行動を現実の規定しているものは、多くの場合、目標への到達の可能性に関する自分自身の見込みの程度をそれに乗じたようなものである。^(註4) 新しい企画に対し躊躇している企業家の胸中には、その成功の齎らずであろう利益 (正の誘意性) と失敗に伴う損失 (負の誘意性) の外に、その成功の可能性に対する彼の見込みが渦まいてゐるに違いない。人間の決断は多くこのような形で行われ、それが単純な場合には、この見込みの大小を目標への距離によっておきかえ、可能性の強い時には距離が小さいと表現することも可能であろう。しかし、一連の可能なる目標が連続体として存在し、当面の目標をその中の一点として選択することを強いられるような場合のコンフリクトにおいては、そのような表現ですますことはできない。

少しく模型的であるが、新企業の規模を決定するような場合を考えよう。企業はその規模の大きい程、成功した場合にはその利益も大きいであろうが、失敗した場合にはその損失も大きいであろう (Fig. 6 A)。そして、もし企業の成立の見通しが規模を大きくするにつれて薄れるものとしたら (B 図)、その人の決断を規模の大きい方へ誘う正の作用力 (利益×成功の見込) と、その人を自重せしめる負の作用力 (損失×失敗の危惧) は C 図のような勾配を示すであろう。勿論、(失敗の危惧) は (成功の見込) の補数である。この場合、横軸は規模の大小

で、企業家はその規模を定めるに当り、C図の均衡点の附近でコンフリクトを経験しなければならないのである。これは安定な第Ⅲ型に相当するからである。寄附金やチップの額を定めるのも、略々、これに似た構造をもつが、その場合、若干の逡巡、躊躇を経験しない人はあるまい。このように、連続体をなしている可能なる目標の集合の中から、ある種の主観的確率の影響の下で、その一つを選択しなければならないという事態も、また、一つのコンフリクトであり、これこそ殆ど専ら人間の行動についてのみに見出されるものということが出来るであろう。このスタイルのコンフリクトの考察は、一方においては要求水準 (level of aspiration) の研究に、一方においては operations research に連るのであるが、その論究は他の機会にゆずらなければならない。

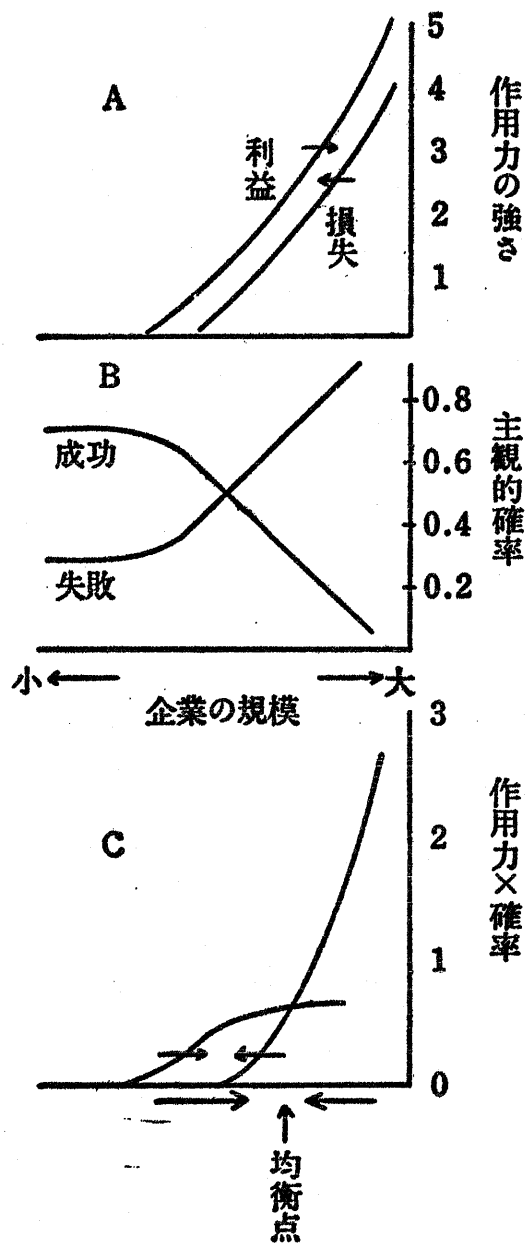


Fig. 9

この種の定式化の意義に関する考察

前節の最後にふれた目標そのものの設定に関するコンフリクトの場合には勿論、既に定立された目標に対する一般のコンフリクトにあっても、われわれの遭遇するコンフリクトの背景には可能性に関する顧慮の存在する場合が少なくなく、これが人間のコンフリクトを特色づける一つの特徴であるという私見を述べることを目的として本稿の筆をとった。この論述に用いられた（前提1、2）（成立条件1、2および4、）ならびに第IV型の存在の指摘は第二節に述べたように、レヴィン、ミイラーの論究を踏襲したものであるが、その場合にも、本論文においてはおわれわれが現実遭遇し経験するコンフリクトを主として考察の対象に選び、あえて概念の比喩的な解釈を許して来た。既に指摘したように、このような定式化は「事後の解釈」であって「事前の予測」にはならない。この性格はレヴィンの、そしてその流れを汲んだミイラーの定式化自身についても既にいわれるところであるが、更に比喩的な解釈を拡張したこの定式化においてその色彩はより著しいものがある。

ここに「事後」と称するのは、コンフリクトが生起したのを見てはじめて、その事態が前記の成立条件を充足したことを知るからで、特定の行動者について、それが何時充足され、従って何時コンフリクトが生起するかを「事前」に予測することは難しい。それというのも、外側の与件だけから、ある行動者にとってある目標が正負いずれの、そしてどれだけの強さの誘意性をもつか、また、その瞬間における目標との距離がいかなる大さをとるかというようなことを導く具体的条件に関する定式化を欠くからである。常に、事後、結果に合わせて論理的に

行動場面の内面的構造が解釈されるのに止まり、この定式化は場面の外部的条件から事前に結果を予測する形をとってはいない。従って、動物実験のような場合を除けば、外部条件の操作によって行動を特定の方角に動かすというような目的に対しては何の役にもたたないであろう。セールスマンや勧誘員に相手が逡巡、躊躇の色を示すとすれば、それは多く第Ⅲ型の状態に相当することがわかっていても、その理解は、それ自身として、購入や契約をしづらせている負の力を任意に弱め相手の決断を都合のよい方に転じさせる操作を教えるものではなく、死に誘発された正の作用力の前に懊悩、煩悶する人に対し、この種の定式化はその状態の形式的構造に理解は与えても、その状態の齎らされた具体的な経過にもふれることもできないし、また、その苦悩を和らげる力にもならないであろう。

このように予測も操作も不可能であるとしたら、どこにこの種の定式化の *raison d'être* がある？。科学論上からいえば、そのような定式化に努めることは徒勞であるかも知れない。それにもかかわらず、しかし、論理的反省によって齎らされたこの定式化にはそれなりの意義のあるように思われる。たとえば事後であっても、コンフリクト事態が生起している以上、少くとも形式的構造において、それは上述の条件を充足しているに違いないし、例えば（命題4）に示されるように、そこには必ず負の作用力を及ぼす何かが存在するに違いないというような常識からは必ずしも明らかとはいえない一つの自覚に導かれるからである。

「雪は天からの手紙である。」これは実験室内において人工的に雪の結晶を作り出すのに成功された中谷博士の名句である。こういう実験によって齎らされた知識は、降って来る雪の観察から天空の氣象状況を推測する手がかりを拓いたことをさすのであろう。はるかなる天空は、少くとも現代においては人間の操作をこえたもので、雪

の場合も、それが降って来る時、われわれはそこに自然に生起している状態を察知するのに止まる。コンフリクトの場合も、条件を限極すれば実験室内において人工的にその状態に導くことができるし、また、その経験と論理的考察により到達した定式化が、自然状態の下において生起しているコンフリクトに対し、その内面の構造に一つの理解を与えてくれるものとしたら、たとえ「事後の解釈」であっても、そこに一つの意義を認めることができるように思うのである。

(註1) これはこの場合に(前提2)の成立が認められるということ、それがこの正の作用力が餌によって、負の作用力が電撃ショックによっておこされているという事情を離れて一般的に成立するか否かは別箇の問題である。

(註2) 例えば、ランプに向って進む力が30cmにおいて170cmにおけるより大きいことが、その場合、前者においてそれまでの走行距離の大きいという事情、あるいは走行速度の大きくなっているという事情によるものではないというような検討が行われている。

(註3) 負の力の低下を認めるにしても、それが負であるがためにアミタールの影響を受けたのか、あるいは、それが正の誘惑性に較べ時間的に後に確立されたからであるのか、それはわからない。なお、この実験は最初ラットを用いて行ったところ、実験的に作り出されたコンフリクト行動に対しアミタールは何ら効果を示さなかったのであるが、猫を用いてはじめて上述の結果を得たといわれている。もっとも、アルコールを用いるとラットにおいてもそれが負の作用力を抑制する形でコンフリクト状態に終焉を齎らすことを示した実験もある⁽¹⁶⁾。

(註4) 主観的確率ということは如何に解さるべきであるか、また、今まで考えて来た作用力にそれに乗じたものを考えることが妥当であるか否かの考察は別の機会にゆずらなければならない。

(1) Lewin, K. *A Dynamic Theory of Personality*. 1935, McGraw-Hill.

(2) Miller, N. E. Experimental studies on conflict. In J. H. Hunt (Ed.), *Personality and the Behavior Disorder*. 1944, Ronald Press. 431—465.

(3) Miller, N. E. Comments on theoretical models. Illustrated by the development of a theory of conflict beha-

vior. *J. of Personality*, 1951, 20, 82—100.

- (*) Dollard, J., and N. E. Miller. *Personality and Psychotherapy*. 1950, McGraw-Hill
- (*) Miller, N. E. Theory and experiment relating psychoanalytic displacement to stimulus-response generalization. *J. abn. soc. Psychol.*, 1948, 48, 155—178.
- (*) Brush, F. R. et al. Stimulus generalization after extinction and punishment; An experimental study of displacement. *J. abn. soc. Psychol.*, 1952, 47, 633—640.
- (*) Miller, N. E., and E. J. Murray. Displacement and conflict; Learnable drive as a basis for the steeper gradient of avoidance than of approach. *J. exp. Psychol.*, 1952, 43, 227—231.
- (*) Miller, N. E., and D. Kraeling. Displacement; Greater generalization of approach than avoidance in a generalized approach-avoidance conflict. *J. exp. Psychol.*, 1952, 43, 217—221.
- (*) Murray, E. J., and N. E. Miller. Displacement: Steeper gradient of generalization of avoidance than of approach with age of habit controlled. *J. exp. Psychol.*, 1952, 43, 222—226.
- (*) Bush, R. B., and J. W. M. Whiting. On the theory of psychoanalytic displacement. *J. abn. soc. Psychol.*, 1955, 51, 47—56.
- (*) Murray, E. J., and N. M. Berkun. Displacement as a function of conflict. *J. abn. soc. Psychol.*, 1955, 51, 47—56.
- (*) Brown J. S. The generalization of approach responses as a function of stimulus intensity and strength of motivation. *J. com. Psychol.*, 1940, 33, 209—226.
- (*) Brown, J. S. Gradients of approach and avoidance responses and their relation to level of motivation. *J. com. psychol.* *Psychol.*, 1948, 41, 450—465.
- (*) Muenzinger, K. F., and F. C. Walz. An examination of electrical-current-stabilizing devices for psychological experiments. *J. gen. Psychol.*, 1934, 10, 477—482.
- (*) Bailey, C. J., and N. E. Miller. Effect of sodium amytal on behavior of cats in an approach-avoidance con-

fiel. J. com. physiol. Psychol., 1952, 45, 205—208.

- (9) Conger, J. J. The effects of alcohol on conflicts behavior in the albino rat. *Quart. J. Stud. in Alcohol*, 1951, 12, 1—29. *

- (15) Masserman, J. H., and K. S. Yum. An analysis of the influence of alcohol on experimental neurosis in cats. *Psychosom. Med.*, 1956, 8, 36—52. *

- (18) Hoppe, F. Erfolg und Misserfolg. *Psychol. Forsch.*, 1931, 14, 1—62.

- (19) Jucknat, M. Leistung, Anspruchsniveau und Selbstbewusstsein. *Psychol. Forsch.*, 1937, 22, 89—179.

- (20) Festinger, L. A theoretical interpretation of shift in level of aspiration. *Psychol. Rev.*, 1942, 235—250.

(*印は直接の参照する機会に恵まれなかったもの)